

編集後記 From Editor

公園の緑の中を散歩する
親子連れ(大阪市中央区・
鞆公園)



今回の特集は、つながりの原点としての「家族」を捉えようとするもので、できるだけ多彩な観点から、各執筆者の方々に家族の今と未来について論じていただいている。

自分の子ども時代をふり返ると、私は家族という「安心装置」の中にいたように思われる。今ほどモノが溢れる時代ではなかったけれど、ささやかな喜びが家族とともにあった。同様に、親戚や近所の人たちなどとの付き合いもごく身近にあった。人と人との間が緊密で濃厚。そのため一方では、子どもながらも多少息苦しさを感じていたように思う。

緊密であって葛藤がない人間関係は少ないだろう。その意味で、家族は人によっては愛憎相半ばする存在である。多かれ少なかれ理不尽な面をもちながらも、多くの人にとって、家族は自分を無条件で受け入れてくれる場所でもあった。

田淵久美子さんも、家族は「ふるさと」のようなものだと言う。そのつながりを通して、自分の今がある。だから、現在は離れて暮らしていても、その人の身になって考えることができる相手は、やはり自分にとっては家族である。

今の日本の社会では、家族の一体感は次第に薄れていき、個人化の度を増しているという。家族のための個人ではなく、それぞれの個人のために家族があるという捉え方。その意味では、現在の家族は期間限定で出入り自由になってきたとも言える。

このような家族の変容を語るときに、その現実とは別に、私自身の価値観では、どこかうまく捉えきれないところがあるのは否めない。船曳建夫氏は、家族の変容は人類史的な大きな流れの中にあるものだと語る。加えて、生まれ育つ中で自身に内在化されてきた価値観とともに、我々はその変化に対応していくしかないのだとも。

これからの時代、家族の枠を越えたさまざまなつながりの中で、個人個人がそれぞれの役割を担っていく必要があるだろう。その際、ネットワークの構築能力の育成が個人にとって重要になってくるのはもちろんのことだが、同時に、個人を孤立化させないための施策が必要になってくることも忘れてはいけない。今後家族はどう変わっていくのか、それが社会や個人にどのような影響を与えることになるのかをじっくりと見極めていく必要がある。

—— 京 雅也

表紙写真 木陰のベンチに休み、親子でシャボン玉遊び/真夏日を記録した初夏の休日、公園の水辺に集まる多くの家族連れ(大阪市)
裏表紙写真 子どもの健やかな成長を祈って神社にお宮参り(西宮市)/こうちパパ楽会が参加して毎年行われる、棚田での「田植え」イベント(高知県高岡郡橋原町)/
角田山妙光寺の共同墓会員のため毎年開催される一大イベント「フェスティバル安穩」(新潟市)

CEL 93号 特集 ■ つながりの原点「家族」を問う

発行●平成22年7月1日 頒価1,000円(送料別途)

■発行 大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所(CEL)
〒541-0046 大阪市中央区平野町4-1-2

■発行人 多木秀雄 Hideo Taki

■編集人 京 雅也 Masaya Kyo / 弘本由香里 Yukari Hiromoto

編集●関西ビジネスインフォメーション(株)内 CEL編集室
〒530-0005 大阪市北区中之島3-2-18
住友中之島ビル7F TEL.06-4803-2307

印刷・製本●日本写真印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY AND LIFE © 2010 OSAKA GAS CO.,LTD.

禁無断転載複写

※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を表すものではありません。本誌・バックナンバーのコンテンツやエネルギー・文化研究所(CEL)の活動内容はインターネットホームページ[<http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/>]でご覧いただけます。

本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申し込みや送付先変更等のご連絡は CEL編集室 Tel.06-4803-2307 Fax.06-4803-2210 cel@kbicom.net まで